

VOICE・樹下の道化

CAST

女
道化
男

#

雨音――

床に、一輪の花が置かれている。
ライトは静かにその小さな花を照らしている。
その向こうに、一人踊る道化の姿がある。

女
私は今、雨の下に立つ。一人、ただ一人。永遠に降り続くその雨の滴は、氷の刃のように鋭く、冷たく、私の体を切り裂いていく。私の肌を、肉を、心を……。そして私は、見えない血を流す。誰にも届かぬ、悲鳴と共に。

私は今、風の中に立つ。ゴオゴオと泡立つ唸りが私を捕らえ、縛り付ける。抗っても抗っても、決して離さぬその唸りは、次第に身のうちに忍び込み、私の骨を砕いていく。そして私は、崖の上に立つ。見通すことなど叶わぬ果ての闇から、呼ぶ声がある。優しく、柔らかいその声に包まれたくて、抱かれたくて、私は手を伸ばす。一步……また一步……。そして……

ゆらりと歩を進める女――
が、際に来て最後を踏み出せず、ためらう。

女
私は……

女はその場に倒れ伏す。
その傍らに立つ道化。
女は道化に気づき、視線を交わす。

男、出てくる。

男
……その日、私は一人の道化と出会った。見渡す限りの荒野の中、どこまでも、ただどこまでも続く一本道の途中、まるで道標のようにポツリと立つ小さな木の下に、彼女はいた。その面に笑顔の仮面を貼り付けて、一人、虚空に向かって踊りながら。道化の足元には、一輪の花が咲いていた。白くて、小さな、どこにでもある花……ありふれた花……

女はゆっくりと語り始める。
その秘められた内心を吐露するように、道化は踊る――

女
雨……雨が降っている。冷たい雨が。ああ、今日もまた、重さを持たぬ言葉ばかりが流れ

ていく。その言葉の渦は嵐となり、濁流となつて、心を押し流していく。私は舞い落ちた木の葉のように右へ、左へ、上へ、下へ、回り、流され、落ちて、浮かぶ。濡れた衣服は身体を縛り、私は薄暗い水底へと沈んでいく。吐き気を催すほどに清く澄んだ水の中では、一筋の汚れなどたちまちのうちに散り散りに切り裂かれてしまう。だから私は、笑顔の仮面をかぶる。溢れ出る無言の悲鳴を、色とりどりの風船に押し込めて。人よ、剣持つ正しき人よ。なぜあなたは、私にその刃を突き立てるのか。この身を磔にし、晒し者にするのか。処刑台に立つ私は、さながらサーカスのピエロだ。その顔に悲しく張り付いた笑顔を振りまきながら、投げつけられる石礫に媚び諂つている。そうして育まれた汚れたナイフは、愛すべきものたちへと向かうだろう。我が身を刻む、征服者に笑顔を、手を差し伸べるものには、相応の報いを。それがサーカスのルールだ。どうせ一日が終われば、彼らは全てを忘れて席を立つ。まるで私のことなど、初めからいなかったかのように。笑い続ける道化を一人残して。

だが、いるのだ。いるのだ。そら、見ろ。道化は今も、そこに立っている。人は肉体を消すことはできない。切り裂かれたその身の痛みから逃げることはできない。傷口から溢れ出た見えない血は、音を失ったその声は、永遠に降り注ぐ冷たい雨となつて、私のこの身を打ち続ける。

語られなかった言葉たちよ。無数の言霊よ。海に投げ出された小瓶のように、永遠に揺蕩う哀れな亡霊よ。だれがお前たちに手を差し伸べるのか。無人の荒野に佇む私は、今日も笑顔の仮面をつける。ただ一粒溢れた涙の化粧に、一縷の願いを込めて。ただ一つ…届けと。

力尽きたように倒れ伏す道化。

女もまた、虚しく立ち続けている。

静寂のひととき――

ふと、女は傍らに咲く一輪の花を見つける。

花…。

女はそのありふれた花の美しさに、なぜか激しく胸打たれる。

その時、女は初めて道化と向き合う。

道化はそつと花を手にとると、女に手渡す。

女はその花を抱きしめるように握りしめる。

雨音――

男

こんにちは、私は道化に声をかけた。「そこで、何をしているのですか」「踊っているのです」道化は答えた。「なぜ、踊るのです」また私は聞いた。「こんな雨の中で」「だって…」彼女は答えた。

女

この道を旅する人は、いつだって寂しいのだから。だれか、その声を聞く人が必要でしょう？

女は、男を見る。

女

この雨を、受け止める人が。

二人の眼差しの相克――

男 「あなたは泣いているのですか。笑っているのですか」私は聞いた。「あら、それは難しい質問ね」彼女は答えた。「だってどちらかだけなんて、そんなことつてないでしょう？」

女 人は笑いながら泣くこともあるし、泣きながら笑う時もあるのだから。辛い？

男 この雨の中で。

女 そうね。辛い時もあれば、心地良い時もあるわ。時には、身も凍るほどの寒さに、じつと堪える時も……。でもね、この世に悲しいことなんて無数にあって、それはきつと、逃げることも、忘れることもできなくて、辛くて、苦しくて、この冷たい雨は、永遠に私の心を締め付けるけれど、悲しみを語る言葉は尽きることを知らないから。だから私は、笑うことにしたの。

女は、足元に咲く花を愛おしそうに眺めながら、

女 だつてね、ほら、こんな荒れ果てた場所にも、花が咲くんです。芽吹きを待つ種が、いくつも眠っているんです。いつ、だれが、どうして埋めてくれたのか分からないけれど、私の中にも、そんな美しい花の種が眠っていると思ったら、

女、笑う。

女 笑う価値はあるんじゃないかと思つて。

女は、そう言うかと軽やかに笑つた。
女 ねえ、あなた、私に種をくれた人よ。今の私は、あなたといた毎日から生まれてきた。だから今、一人生きる私の内には、あなたの温もりが息づいている。あなたと触れた喜びが、あなたのくれた温もりが、深く、深く、永遠とも思える時を越え、今、私の身の内に満ちていく。だから私は、今までよりも、ほんのちよつとだけ、強くあるうと思いません。

女 男 女

男はふと、自分の手の中にも、同じ花が咲いていることに気づく。
その花を、静かに見つめる男――

女 どうかあなたも、この種をお持ちください。この先の、歩みの為に。

そう言うと女は、男に手を差し出す。

男は静かに握り返す。

女 男
：それじゃ。
ええ。

男はまた、道を歩き始める。

男 私はそう言つて、そこを立ち去つた。しばらくすると、雨は止み、永遠に続くかと思われた一本道は、いくつかの道と交わり始めた。一人、また一人、行き交う人を眺めながら、彼らもまた、あの道化と出会うのだろうかと考えていた。

一人立つ、女の姿――

女

ありがとう。さよなら。おはよう。ただいま。小さな言葉が、私の体をすり抜ける。時に優しく、時に冷たく、赤子の髪を撫でる母のように、剥き出しの肌を刺す北風のように。その止めどない流れの中で、私は笑う。ただ一粒溢れた涙の化粧に、一縷の願いを込めながら。

聞こえますか？

ねえ：聞こえますか？

END